

韓非子翼毳跋文国訳嘗試

土屋紀義

はじめに

太田方（号全齋、宝曆九年・一七五九）文政一二年・一八二九）の著書『韓非子翼毳』は、『韓非子』研究史上画期的であるというだけではなく、近世出版史においても名高い書物である。近世後期、相当数の活字刊本が刊行されているが、そのうちの一点である本書の跋は、刊行の動機、刊行の際の苦勞、それも個人がほとんど独力でとりくまねばならない場合の苦勞等を克明に描いており、近世出版史の資料としても大変興味深いものである。本跋文は、当時の漢学者の著作の常として全文漢文で書かれており、しかも仲々に読み難い。昨年、当館で開催した展示会「出版のあゆみ展」のための準備作業の置土産として、ここに、大方の御参考までに現代日本語への訳を試みた次第である。浅学非才故の誤なきにしもあらず、御批正を賜れば幸である。

この訳にあたっては、テキストとして国立国会図書館に所蔵する近藤正斎旧蔵の原刊本を用いた。（請求記号 別五―四、巻一―四を欠く。）

本跋文には、管見の範囲で、三種類の翻刻がある。刊行年順に列記すると次の通りである。①亀田次郎著「太田全齋伝補遺」三七―三八頁（『国学院雑誌』一一卷三号、明治三八年三月）、②『漢文大系』第八卷、卷末二頁（明治四四年六月）、③『天理図書館蔵木活字版目録』六二番『韓非子翼毳』の項（昭和五九年）。①は、読点が打ってあるが、若干の誤りがあり、誤字も多く文章をつかみかねる箇所がある。亀田氏の拠った当時の帝國図書館所蔵本の誤りだけではなく、亀田論文自体の誤植もあり、後者の場合の方が多い。②は、句読点・訓点を付す。訓点に一、二疑問の箇所のある他は、文字の誤脱は皆無である。③は跋文の後半のみを収め、点は全く打っていない。二、三の誤植がある。

この訳に際しては、以上三種類の翻刻のうちの①、②の句読点を参照した。

訳

わたくしは、『韓非子』注解のために、この十余年研究をつみ

かさねて来た。いまだに完成できないでいるのに、さきごろ城北菓鴨のまちで発生した失火があやうく藩邸に延焼しそうになり、すんでのことに長年の努力の結晶ををけむりにしてしまつて、二十部を印刷する。完成していない著述のことゆえ、つづらにとじこめておくべきではあるが、ただ一旦火事にあつた際に、それまで続けてきた仕事を仕上げるのに用いる副本がなくては心配である。そこで印刷して自家用に備えるのであつて、世間に公開するつもりは全くない。昔、朱子は『四書集注』を著わしたが、晩年に至つてもなお『大学』の誠意章の注釈を改訂した。程伊川は『易伝』を著わし、終身、未完成であると考えていた。まして私のような能力のとぼしい者が先秦の文業に注釈を加えたりしたのだから、棺を蓋うてのち定まるというわけにはまいらない。いったい多く見聞して、その中から善いものを選ぶというのが、大聖人孔子の原則であつた。わたくしときては、見聞は少なく善いものを選ぶなどというには程遠い。記述の食いちがいや重複の個所が次々とあらわれるが、とりあえずはいずれ訂正を行う機会にまつしかない。注解をつけたところが翼とならず、かえつて羈絆となつてしまふことに羞じ入るばかりである。享和元年（一八一〇）江戸藩邸において書し、福山太田方題す。

この活字版は、佐坦蔵が、玉河某氏に造らせたものである。辛酉の年（享和元年）の冬に入手した時、木活字は二万余であつた。木活字はいたんでおり、ガタガタでこぼこで五日に一枚しか印刷できず、いたずらに労力を費すのみであつた。

そこであらためて職人にたのんで補修し、また足りない活字を追加して従来の分とあわせて全部で三万余となつた。そしてさらに印刷にとりかかろうとしたところが、妻がながわすらいにとりつかれてしまった。妻は翌年もしばしば病氣にかかり、はやりやまいにかかつたこともあつたが、この年陰曆三月には右手の指がはれて痛くなり、手当てのいかいもなく痛みはつるばかり、氣力体力ともに衰弱してしまつた。幼くかわいい五番目の息子を抱くこともままならなかつた。末娘は母乳が飲めないので一晩中なきわめくため、かきいだいて歌をうたつてやりながら、立ちっぱなしで朝に至ることもあつた。炊事やつくろい物も行きとどかず、たまたま傭人がやめてしまい、水くみ、米つきにも人手を欠き、本書刊行の仕事に手がまわらなかつた。この二年間というもの困難は窮まるところまで行きつき、本書刊行の仕事も、ほとんど放棄せざるを得ないところまで立ち至つた。そんなさなかに、おいの塩田屯が財を投げうつて資金援助をしてくれ、十三才になつたばかりの長男周も、自ら彫刻刀を手にいろいろ手伝つてくれた。この頃には妻の健康も回復し、家事ももとおりになすようになった。しかし、私の方は、公私の用事に妨げられ、なかなか出版のための時間をさくことができず、一家の者たちもこの仕事にいや氣がさしてきていた。今『武英殿聚珍版程式』を見るに「木活字二十五万個」とある。歴史家はこれをたたえて文運隆盛なるかなと言っている。そもそも無能貧困の親子が大国の文化事業の向うを張ろうというのが身の程知らずもはなはだしいというもの。とは言うものの中

途でこの仕事を放棄するのもくやしい。そんなこんなのうち
に歳月がいたずらに過ぎてしまった。二男、三男も成長し、
皆父の仕事を手伝った。兄弟三人大いに努力し、父子ともに
早起き夜なべして、時に戊辰(文化五年、一八〇八)孟夏(旧
曆四月)この仕事を終えることができた。遺憾ながら植字は
つたなく息子の彫刻の腕前もおそまつ、出来上つての体裁は
みつともなく、出来の悪さは充分承知している。民間で作ら
れた活字版『鷓冠子』をはるかにしのぐ出来上りにしようと
めざした『武英殿聚珍版』にくらべたら見るにたえないとは
言うものの、古の愚公が石を一つづつ運んで山を移そうとし
た志にあやかろうという次第。寛容なる方々が、この仕事に
少しでもとりえを見出して下さり、出来上りのまずさを見の
がして下さればと、ただただそうであることを願うばかりで
ある。

太田方 擺ひら
男 周 彫
男 信助 彫
男 三平 刷

注

(一) 失火、原文には「直突之災」とあり。直突とは、文字通りには「まっ
すくな煙突」のこと。出典は『漢書』卷六八霍光伝にみえる次の説話。

客有過主人者、見其竈直突、傍有積薪、客謂主人、更爲曲突、遠徙其薪、
不者且有火患。主人嘿然不應。俄而家果失火、鄰里共救之、幸而得息。於是
殺牛置酒、謝其鄰人、灼爛者在於上行、餘各以功次坐、而不錄言曲突者。人

謂主人曰、鄉使聽客之言、不費牛酒、終亡火患。今論功而請賞、曲突徙薪亡
恩澤、燹頭爛額爲上客耶。主人乃寤而請之。

同一説話が『説苑』權謀編にもみえる。

この火災は、『東京市史稿』変災編第五、寛政九年(一七九七)の条に「歴
代炎上鑑」を引いて「十一月二十八日、巢鴨原町(現在の文京区千石四丁目
のうち)六兵衛店長左衛門後家きり物置より出火十丁餘、幅一丁程」とある
ものである。「武江年表」寛政九年の条にも「十一月二十八日巢鴨原町より
出火、十一余町焼失す。」とある。

(二) 藩邸、現在の文京区西片一带にあった福山藩中屋敷。巢鴨の出火地点
からは一・五キロ程の地点にあり、北西の季節風の吹く時期には風下に位置
する。

ちなみに、著者太田全齋は、福山藩の定江戸藩士であった。

(三) 「二十」という数字は、従来、実際の印刷部数と考えられてきた。しか
し、長沢規矩也は増補版『漢文大系』卷八(富山房 昭和四十八)の解題に
おいて、これに疑問を呈して、「跋の「刷二十部」という数字については、年
来疑を持つ。二十部にしては伝存本が少し多過ぎる。」と言っている。私は
これは従うべき見解であると考える。後掲注(十三)において具体例をあげ
て指摘したが、著者太田全齋は、この跋文を書くに際して、『武英殿聚珍版程
式』の存在を強く意識しており、その語句をそのまま流用している箇所すら
ある程である。ところで『武英殿聚珍版程式』六丁才(私は、金子和正編著
『中国活字版印刷法』(汲古書院、昭和五十六年)所収の影印本を用いた。)に
「每部擬用連四紙、刷印二十部、以備陳設」とある。太田氏は、この数字を
そっくりそのまま流用したのであり、跋文における「印二十部」という語句
は、「少数印刷する」という意味を象徴的に表わすのであって、「聚珍版程式」
の数字に忠実に従って、実際に二十部印刷したという意味ではないのではあ
るまいか。出典の語句の意味を若干ずらして自分の文章に流用するという修
辭法は、中国古典文における常套手段の一つである。

(四) 朱子が晩年に至るまで著書の改正をやめず、死の三日前に『大学章句』

誠意章の字句を改訂し、これが絶筆となったという逸話をさす。王懋竑『朱子年譜』巻四之下。

(五) これは、次のような逸話をふまえていると思われる。

(崇寧) 五年(一一〇六)復官義、即致仕。時易伝成書已久、学者莫得伝授、或以爲請。先生曰、自量精力未衰、尚頗有少進耳。後寢疾、始以授尹焯、張釋、大觀一年(一一〇七)九月庚午、卒于家、年七十有五。『伊洛淵源録』巻四、伊川先生年譜)

ちなみに「易伝」の序は没年に先だつこと八年の元符二年(一一〇九)に書かれている。

(六) 「論語」述而編に「子曰、蓋有不知作者者、我無是。多聞擇善者從之、多見而識之、知之次。」とある。

(七) 「佐坦蔵」については、はじめ佐藤一斎(名は坦、通称は捨蔵)と考えられていた。(例えば『漢文大系』第八巻解題、前掲亀田次郎「太田全齋伝補遺」)しかし、早くから本城實は、この比定に疑問を呈し「是活版佐坦蔵所使玉河某造也とあるを、亀田氏のみならず、他にも佐坦蔵即ち佐藤一斎なりと信ずる者あれども、こは少しく武断に失せずや、佐は定めて省姓なるべければ、佐々木なるや、佐野なるや、佐久間なるやも、知れず、必ず佐藤とのみは断じがたかるべし、又一斎は名は坦、通稱捨蔵なれば、名と通稱の一字とを取て、坦蔵と呼ぶが如きは萬々これあるべからざると信ず、」(「太田全齋伝に就きて」、『国学院雑誌』一一巻八号、明治三八・八。)と言っている。近年、川瀬一馬は「木活字」〔十部限定〕韓非子翼龔(雄松堂、昭和四七・一〇)解説(後に「続日本書誌学之研究」雄松堂、昭和五五、所収)において、佐坦蔵とは、考拠学の提唱者吉田篁墩(延享二年、一七四五)寛政一〇年、一七九八)のことであるとしている。前掲注(三)に引いた長沢「解題」も佐坦蔵すなわち吉田篁墩なりとしている。理由は二つ。吉田篁墩は、通稱坦蔵、佐々木氏を稱していたことがあり、「翼龔」に用いられているのと同種活字が篁墩の著書「論語集解攷異」に用いられている。川瀬、長沢二氏の説は定論である。

う。『日本古典文学大辞典』第六巻(岩波書店、一九八五年)の「吉田篁墩」の項もこの説に従っている。

(八) 「玉河某氏」について前掲長沢解題は、同一活字を用いて天明八年(一七八八)に印行された「上五経正義表」の刊語の末にある「玉河 岡正礼」のことであろうと推定している。岡正礼という人物については不詳。

(九) 原文「維暮之春」。『詩経』周頌「臣工に「嗟嗟保介、維暮之春、亦又何求、如何新畚」とあり、『詩集伝』に「暮春、斗柄建辰、夏正之三月也。」とある。

(十) 前掲川瀬解題は福山藩士としている。「広島県史」近世資料編II所収の阿部家分限帳(宝暦末、明和初のもの)と推定されている)の定江戸藩士の項に二名の塩田氏がみえる。『国書総目録』には、『景清小旗之銘』塩田屯模刻、寛政一〇刊「姓林全書」伊藤東涯編、太田方、塩田屯補、と二名の塩田氏がかかわる資料が著録されている。

(十一) 『武英殿聚珍版叢書』刊行のことをさす。この叢書は、清朝第六代の皇帝乾隆帝(在位一七三五―一七九五)の命により「四庫全書」編纂に並行して「永樂大典」からぬき出したもの、あるいは伝来まれな書物を、一三〇―一四〇種類、木活字版により刊行した。「武英殿聚珍版程式」は、前掲「中国活字版印刷法」によれば、「武英殿聚珍版」の「出版事業報告書」である。(一〇〇頁)。

(十二) 「植字はつたなく」、原文「宋字不巧」とあるが、「宋字」の意味が良くわからない。「宋」は「説文解字」に「宋居也」とあり、「すま」という意味である。今かりに、「宋」は「居」と同義であるから、「宋」には「居」の意味のうち「固定する」という動詞としてのはたらきもあるとこじつつけて、「字を居く」すなわち「植字」と解してみたが、望文生義のそしりは免れまい。

(十三) このくだり原文に「精越鵲冠子」とあり、文字通りに訳せば、「出来上りのよさは『鵲冠子』にまさる」となるが、これでは何のことかよくわからない。これは、太田全齋が、『武英殿聚珍版程式』のことばを、そっくりそ

のまま流用しているからである。すなわち『武英殿聚珍版程式』冒頭の「御製題武英殿聚珍版十韻」に「同爲製活字、用以印全書、精越鷓冠體」とあり、その原注に「昨歲江南所進之書、有鷓冠子、卽活字版、第字體不工、且多訛謬耳」とあるのにもとずいているのである。訳文では、これにしたがって、原文に対してかなりことを補った。

ここにいわゆる活字版の『鷓冠子』とは、『増訂四庫簡明目錄標注』の子部・雜家の項に「懽薇孫家見明活字本三卷、半葉十行、行二十字、注大字低一格、板心有碧雲或弘治年或活字三字、乾隆題詩一首、館臣有跋、蓋聚珍本所自出也。」(中華書局排印本五〇六頁)とみえるものである。この弘治年間(一四八八—一五〇五)刊の活字本は現在北京の「中国国家図書館」に所蔵されている。『北京図書館古籍善本書目』(北京、書目文獻出版社一九八七年序刊)子部・雜家類に「鷓冠子解三卷 宋陸佃撰 明弘治碧雲館活字印本(四庫底本)清高宗弘曆題詩 袁克文跋 三冊 十行二十字」(一三八五頁)とあるのがそれである。同一刊本の所蔵機関は他に見当たらない。

(つちや・のりよし 参考課)